

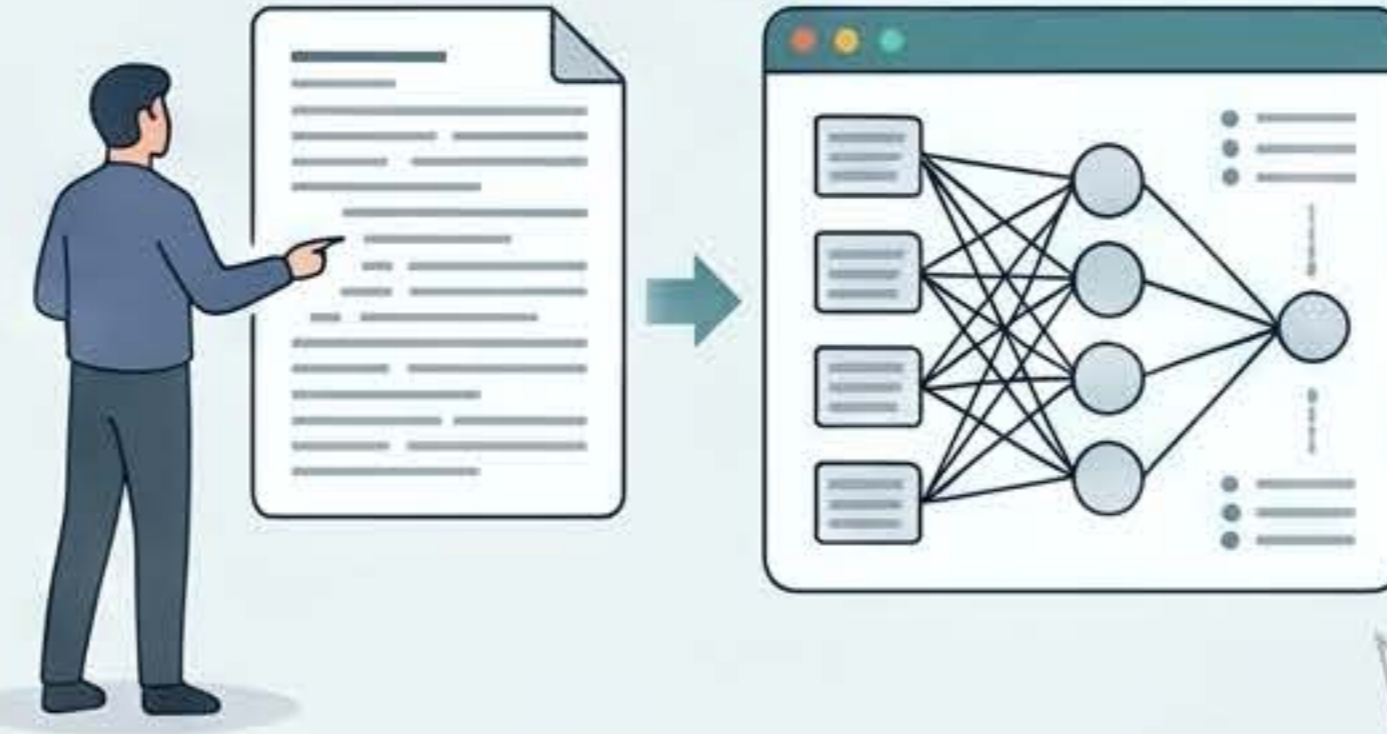
特許調査業務の進化：従来・生成AI・AIエージェント型調査の比較

従来調査： 人が検索し、人が読む



調査設計から判断まで全て人間が行うため、説明責任と執業者の負荷に依るが、工数が大きく属人化しやすいリスクがある。

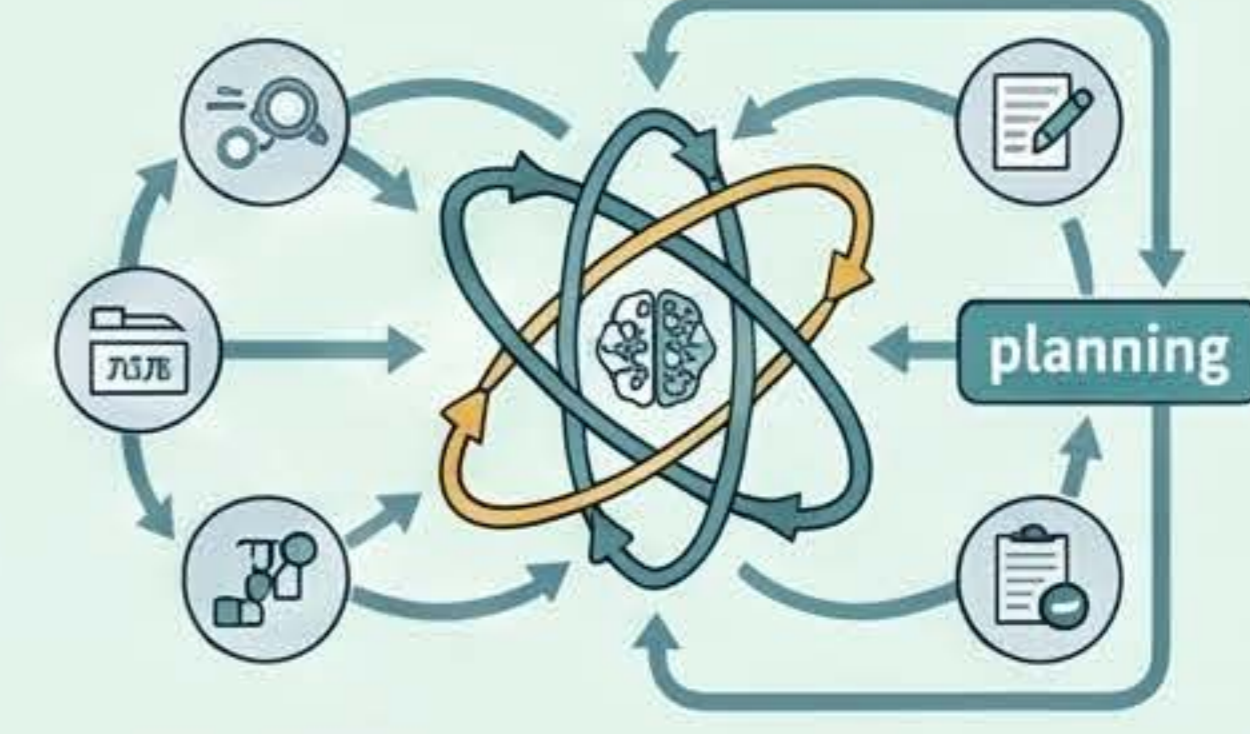
島津製作所型 生成AI調査： 判断ロジックのプロンプト化



ベテランの思考プロセスを形式知化してAIに一次処理（要約・分類・根拠抽出）を任せることで、標準化と大幅な工数削減を実現する。

事例：島津製作所で以検査隊計スクリーニングの手作業をBIPW削減、年間9,600万円の弊害コストを削減

AIエージェント型調査： 自律的な反復と監査



AIが調査計画から追加検索、報告書作成までを自律的に繰り返し、人間は目的設定と最終的な法的責任・戦略決定に集中する。



Human-in-the-Loop
(人間による監査)

調査種別ごとのAI化適性とリスク

新規性調査：AI化しやすく親和性が高い



発明の特徴抽出や対比表作成はAIが得意とする領域であり、AIエージェント型への移行も比較的進めやすい。

AIによる一次抽出	高い
法的リスク	中
監査の重要点	開示箇所と産異
最適な人間間与	出願戦略判断

無効資料調査：広域探索には有効だが監査が必須



審査官が見落とした文献や非特許文献の検索にAIは威力を発揮するが、証拠としての採用可否や証拠構成は人間専門家の判断が不可欠。

AIによる一次抽出	高い
法的リスク	高
監査の重要点	証拠性・無効論理
最適な人間間与	権利・訴訟戦略

FTO (侵害予防)：最も慎重なAI活用が求められる



事業リスクが非常に高く、単なる類似検索では不十分なため、AIは機械監視の基盤として活用し、最速判断は必ず人間が行うべきである。

AIによる一次抽出	高い(監査理職が分類)
法的リスク	非常に高い
監査の重要点	権利範囲・充足性
最適な人間間与	法的着見・事業判断

実務導入の5段階ステップ

第1-2段階：作業補助と一次スクリーニングの標準化

要約・翻訳・用語展開から始め、判断ロジックをプロンプト化してリスク分類の自動化を回す。

第3-4段階：レポート作成支援とエージェント型への拡張

構成要件の分説や対比表の下書きをAIが行い、さらには検索式の改善をAIが自律的に繰り返す段階へ移行する。

第5段階：監査型ワークフローの確立

高リスクな調査において、AIが作成した調査パッケージを人間が承認・レビューする専門家承認プロセスを制度化する。

必須監査項目

- ✓ 根拠箇所と出典の厳格な照合
ハルシネーション(嘘)を防ぐため、AIが引用した文献番号、公開日、該当段落が実在し、主観を支えているかを必ず人間が確認する。
- ✓ 検索の再現性と除外理由の記録
無効資料調査やFTOでは、AIがどの文献を「ノイズ」として除外したかの理由を監査可能にしておくことが、後の調整対応で重要となる。

